

第 43 回 RELC International Seminar 参加報告

RELC 担当：山内ひさ子
(長崎県立大学シーボルト校)

RELC (Regional Language Center、シンガポール) は JACET が交流協定を結んでいる学術団体の 1 つで、シンガポールに本部を持ち、東南アジア 12 カ国の文部省の協力組織となっている言語教育機関です。今年 4 月 21~23 日に開催された第 43 回 International Seminar に JACET 代表として参加し、研究発表を行いました。大会は 43 回目ですが、RELC の組織自体は発足して 40 周年を迎えたそうです。開会式の会場では開始前に 40 周年の歴史を振り返るビデオが流されていました。

今年の大会テーマは “Language Teaching in a Multilingual World: Challenges and Opportunities” で、プログラムの内容は国内外よりの 12 名の招待講演者による講演、ワークショップ、全体シンポジウムと 50 件の研究発表、企業主催のワークショップなど、たいへん内容の濃いものでした。JACET からは関東支部長の中野美智子先生が招待講演者として参加されていました。招待講演者の講演は 3 件が同時進行、ワークショップも初日が 7 件、2 日目は 9 件が同時進行、研究発表も 8、9 件の同時進行のため、私は限られた講演や研究発表しか聞くことができませんでした。Dr. Alaster Pennycook による “Changing Global ESL Practices in South East Asia”、中野美智子先生による “Cross-Cultural Distance Learning Programs with Universities in South East Asia: e-Learning to Foster a Global Citizen in Asia”, Dr. Sandra Lee McKay による “English as an International Language: Where We are and Where We Need to Go” と Dr. Anne Pakir による The Global Spread of English : Implications for Standards and Standardization” の 4 つの招待講演を聞きました。国際語としての英語を考えた場合、World Englishes の多様性がそのまま保たれるのか、それとも将来的に「標準英語」なるものの必要性が論じられるようになるのか。もし「標準英語」なるものが必要となれば、どのような英語になり得るのであるのか。このような話題が中心を占めていました。また、英語教育法としては Communicative Approach が fluency を重視したあまり、accuracy が伴わない学習者を生み出したという指摘、自国文化を英語学習に反映させることの重要性、EFL の国において英語の翻訳の必要性、英語のみで教えることの困難さや学習の非効率さなどが取り上げられていました。また、コンピュータテクノロジーの語学教育への多様な利用方法などの研究発表もありました。

私は “Effectiveness of Blended Learning: CALL and Paper-Based Materials” というタイトルで研究発表を行いました。また、JACET 会員の藤枝美穂 (京都医療科学大学) 先生と鈴木広子 (東海大学) 先生による共同研究発表がありました。

RELC International Seminar では ELT, ESL, EFL など多様な英語教育に関する情報が得られます。また、英語以外の外国語教育やバイリンガル教育などに関するもの、授業実践報告としては Reading, Writing, Grammar, Vocabulary, Culture, Project-Based Learning, e-learning などがありますので、多岐にわたるトピックでの情報交換ができます。したがって、日本の英語教育に於いて、今後話題になりそうな情報に触れる機会を与えてくれますので、会員の皆さんも RELC の International Seminar に参加され、研究発表をされることをお勧めします。